

円居

まどぬ

令和6年6月28日(金)
備前市立備前中学校
校長 藤森 卓麻
0869-64-3365

学校行事のチカラ

1 体育会を振り返る 1

体育会が終わって一か月が経とうとしています。その後子どもたちは、備前東地区夏季総体、そして一学期の期末テストを終え、普段の学校生活を送っているところです。学校行事の精選や、部活の地域移行の中で勝利至上主義からの脱却が叫ばれる中、あらためて子どもたちにとってこの体育会は何だったのだろうかと振り返ってみます。



閉会式でもお話ししましたが、この体育会では順位が付きません。それぞれの競技で、そして学年内で。もちろん子どもたちは、少しでも上の順位を目指して、全力で走ったり跳んだり投げたり蹴ったり回したりしていました。勝利を目指すことを否定すれば、時に競技そのものを否定することになるので、一番を目指すことを否定することはありませ

か負けるか。上位の大会に進めるか進めないか。成功か失敗か。ところが備前中はそんな世界ではありません。運動が好きなきもいれば、本を読む方が好きな子もいます。一人でじっくり何かに取り組む方が好きな子もいれば、みんなとワイワイ賑やかにする方が好きな子もいます。いろんな子が集まった中で、バトンをつないだり、大縄を跳んだりするっていうのは考えやすくていいことです。子どもたちが大事にしていたのは、一番は目指すけれど、どうやって目指

すかということでした。いろんな子が集まった中で、自分たちならではの方法で、頂上に向かって登っていくということ。自分たちならではに「繋がる」でした。(生徒会スローガン「繋げ輝け」)そして全校生徒が繋がるために生徒たちが取り組んだのが、順位も何もつか



い「ソーラン節」です。実行委員が中心となって進んでいった練習風景はとても素晴らしいものでした。細かいところまで徹底的にこだわりながら、前に立ってみんなを引っ張った実行委員たちはもちろん素晴らしいですが、それを支えた他の全校生徒がいたからこそ、この景色でした。学年やクラスでも自分たちならではの方法で繋がりが目指した頂上(一位、優勝)ですが、たとえたとどり着けなかったとしても、振り返った時に見える景色はきっと格別なものになるはず。こういった体験を通して子どもたちは成長していきま

南米ペルーの「UNDOKAI」

私がかつて赴任していた南米のペルー、明治から多くの日本人が移民としてペルーに渡り、今でもブラジル、アメリカに次ぐ大きな日系人社会が存在する。(岡山県人会もある)だから、日本から見れば地球のほぼ反対側になるペルーにも「UNDOKAI」が存在する。5月にはペルーの日系人社会全体の大運動会「日秘友好運動会」が、立派な競技場で大々的に開催される。子どもから年配の方まで、カテゴリーごとに分かれて様々な種目に挑戦する。白のスポーツウェアでそろえた何百人もの参加者による「ラジオ体操」は圧巻だった。先祖への思いを受け継ぎながら、この「UNDOKAI」は今もペルーで愛されている。(※米IIアメリカ、と同じように秘IIペルー)

さらに以前紹介した日系の現地校(この学校は日系の学校だが、日系人以外の子どもたちも通っている。昨年11月に佳子さまも訪問されている。かなりの大規模校。※『円居』令和5年5月参照)でも「UNDOKAI」は実施される。ラテン系の盛り上がりもあり、かなりの熱量だ。毎年ここに日本人学校の子どもたちがゲストとして招待され、「綱引き」に参加していた。カリキュラムの中に、

日本文化の価値観や伝統に関することも組み込まれており、この「UNDOKAI」からも、

ペルーの子どもたちはきつと何かを学ぶのだ。ちなみに、この「UNDOKAI」では4つの

縦割りのグループに分かれて競争する。そのグループ名は「赤

・青・黄・緑」ではなく…!?

校舎に掲げられた4チーム



平成(HEISEI)チームの応援合戦

備前中HPから「学校の様子」がご覧になります。

